

◎**はじめに**

この本は、私の３０年前の大学３年生時一生懸命思い出しながら書いた。

英国のケンブリッジという最高学府の街で、体験した１か月のホームステイ（語学学校）の滞在記、恋愛記の本です。

今５４歳なので、約３０年前のケンブリッジの思い出を、思い出しながら、書いた。

ケンブリッジ、ホームステイの全費用は、大体総額５０万円だったと記憶している。

楽しい事もあったが、それだけではない、戸惑う事、困った事もいろいろあった。

このタイトルのオニバというのは、フランスのシニョン美人のマリアンヌさんが家から一緒にパブに自転車で出発するときにいった、フランス語の「一緒に行こう！（Ｏｎｙｖａ！（Ｌｅｔ，ｓｇｏ）の意味です。

さあ、あなたも私の英国の１か月の体験記に一緒に行こう（Ｏｎｙｖａ！）

「日本から来て変！」それが、マリアンヌの私に対する第一声であった。

いきなり言われて、正直、面食らった。

何言ってんだろう。この娘は？

私は、今から約３０年前、私立医学部３年の時、夏休み、何もする予定もないので、

英国に語学留学をした事のある、姉の勧めもあって、幸運な事に英国、ケンブリッジの語学学校に１か月ホームステイする事になった。

ホームステイ先の家庭は、英国は、首都ロンドンから北へ８０ｋ行った大学都市ケンブリッジの街中心部から、イギリス家庭（５ＬＤＫぐらい）へは、自転車で２０分、

車で１０分の距離だった。５ＬＤＫ、１戸建てで、住宅価格、１億２０００万円くらいなんだって。結構、高級住宅地なんだな！

到着した翌日。イギリス人家庭先で、

「おはようございます」「Ｇｏｏｄ Ｍｏｒｎｉｎｇ！」

はとりあえず、言えたのだが、その後、ご家庭の人々と、マリアンヌが、英語で私に聞いてきたのだが、よく理解できなかった。

「Ｓｏｒｒｙ？Ｓｏｒｒｙ？」何度も聞き返した。

英国人家庭の奥さん、「わかったわ！ヤス、あなたは英語ができないのね？」

私は、ちょっとショック受けた。

だって、日本で中学校から大学３年生まで、約１０年、日本人英語教師に、英語文法を中心に英語習ってきた自負があるし、

少しだけど、近所のＮＯＶＡ（外国人の英会話教師による英会話学校）に通って、多少の英語はできてた気になっていたが、いきなり、「ヤス、あなたは英語ができないのか？だった」かなりショックを受けてしまった。

そんな、「あなたは英語ができないのね！」とはっきり言われてしまった僕であるが、翌週の月曜日から自転車で１５分の、語学学校に授業を受けに行った。

ケンブリッジの語学学校（Ｓｔｕｄｉｏ Ｃａｍｂｒｉｄｇｅ）は、ケンブリッジ駅から自転車で１０分、ケンブリッジ大の植物園の近くにあった。日本の語学学校というと、たいていビル内にあるが、そこの語学学校は、英国らしく１５０年前くらいのビクトリア朝時代の石造りの建物をリノベーション（内部改装）して、使っていて、とても趣のある

建物だった。

英国人は、物を大切にする文化があるらしいが、建物も然り、外部の歴史ある建物を大切に保存し、内部だけを手入れ（リノベ）し、大切に建物を使い続ける
なんて事も多いと聞いた。

夏休みの1か月の語学学校であるが、世界中から、学生が集まってきていた。
フランス人、スペイン人、イタリア人、
クロアチア人、アジア系などなど。

まず、初回は、その人が、どれくらい
英国英語ができるか、レベルチェック、
テストを受けた。

これが幸か不幸か、中の上レベル（推定）に認定されてしまったようだ。

その試験の認定のように、中の上のレベル

（スコットランド人担当）をクラスに入って、授業を受け始めたのだが、スコットランド人の英語が全然チンプンカンプンで、聞き取れない。だんだん、焦ってきてしまった。

「こんな生活あと4週間もできない！」

自分なりに、とても悩んだあげく語学学校の事務所に相談にいった。

「あのー、すいません。僕、中の上の、スコットランド人の先生のクラスに入って、英語勉強しているのですが、全然、聞き取れなくて、内容がチンプンカンプンなのです。助けて下さい。他のクラスにして下さい。」

語学学校の事務の英国人「そうですか～、今のクラスであってるようなんだけど。。分かりました。中の中くらいのレベルにしてみましょう。」

今後はキャサリン先生という、中年女性の英語の先生です」

最初は「日本から来て変！」と言われてしまったマリアンヌさんであるが、ステイ仲間として一緒の屋根の下で暮らし始めると、時間を経るにつれて、なんとなく気心が知れ、次第にカタコト英語で、コミュニケーションがとれるようになってきた。

マリアンヌは、お互い語学学校の英語の授業が終わり英国人宅で、夕方にケンブリッジの有名パブ、アンカー（錨（いかりの意））に一緒に行こうって、誘ってくれた。

自転車で15分の所だ。クイーンズカレッジ沿いの、銀通りを少し行った所の、ケム川に面したほとりにある、なかなかの雰囲気のパブ（居酒屋）だ。世界各国の人が、

ここに遊びに来ながら、英語で冗談など、話しをしながら、楽しんでた。

みんな、大概英国人のお好きな生ぬるい温度のギネス（黒ビールラガービールを、好んで飲んでいるように、記憶してる。マリアンヌは、他

の国の男性とビズ

（フランス流の顔を接触させる挨拶）をする事があった。

「へえ～、フランス人て、握手だけでなくこんな、顔を接触させる挨拶までするんだ、凄いな～。いつか僕もやってみたいな～」

率直な、僕の感想だった。

ある日の夕方、いつものアンカーパブに、自転車でステイ先の家を、マリアンヌと一緒に自転車で出発しようとした。

マリアンヌが、おもむろにフランスのスカーフを首に巻こうとした。

「おお～、マリアンヌ、かっこいいな～」と

思った。」ので、「Marianne, You are Nice, Nice! Scarf!]とマリアンヌに言った。

マリアンヌは、一瞬、「は？」って返事した。でも、私の意図することを理解したらしく、

「ああ、これね。フランス女性は、よくスカーフでおしゃれするの。必ず

しも高くないものよ。自分が本当に好きな物で、自己表現するの」みたいに、説明された。「ふーん、フランス女性って、かっこいいんだな！」って感じた。「フランス語で、Ｓｙｍｐａ（なんか素敵）」っていうのよ。私、「そうか、Ｖｏｕｓ ｅｔｅｓ Ｓｙｍｐａ!」言ってみた。

マリアンヌ「ダメダメ、Ｔｕ ｅｓ Ｓｙｍｐａ !って言って！」

私、「Ｔｕ ｅｓ Ｓｙｍｐａ !はちょっと言えないな！Ｖｏｕｓ ｅｔｅｓ Ｓｙｍｐａ !」

マリアンヌは、両手のひろげながら、「残念！」って言った感じで、苦笑いした。。

ステイ仲間のフランス女子マリアンヌさんと、少しずつ英語でコミュニケーションができる

ようになると、ステイ先の英国人夫婦とも、少しずつ英語でコミュニケーション

できるようになってきた。（ひょっとすると、聡明なマリアンヌがイギリス人夫妻に、自分が付き合ってみるとヤス（自分）はこういう人なんだと、説明してくれたのかもしれない。。）

ある晩、夕食後ステイ先で、イギリス人家庭とマリアンヌと私で、リビングで団らんした。

イギリスのご主人が、「ヤス、なんかする？ウチにＤＶＤ色々あるから、観たら？」っていわれた。

確かに色々ある。（中には、ローマ人の甲冑姿のもあるが、これは、日本だと、時代劇モノの相当するんだろうなって感じた）

「そうですね、これなんか、どうでしょう？」私は、ご主人に返答した。

「Ａｓ ｙｏｕ ｌｉｋｅ ｉｔ！（お好きなようにどうぞ～）」

どうやら、ご主人、シェークスピアの有名な戯曲（ぎきょく）から、取ってきたきたらしい。

私「（シェークスピアからとってきたのか～～、

なんとも、大人の貫禄の言い回しだな～～、なかなかやるな～」

だった。**紳士の国（大人の国）英国の一面を垣間見た瞬間であった。**

イギリス人家庭には３人の子供がいた。一番上、女の子、真ん中と一番下が、男の子。上の子が小学生高学年くらいで、下２人が、小学生低学年

くらいかな？

ある時、マリアンヌがこう言った。「ヤス、実はね、秘密にしていて欲しいのだけど、一番下の子は、Ａｄｏｐｔｅｄなの。だから、イギリス人家庭のご主人は、とても器の大きい、広い心の人なの」私、「Ａｄｏｐｔ??」私は、また、Ａｄｏｐｔの英語の意味が分からかった。後から分かったが、どうやら、養子ってことらしい。

マリアンヌとしては、イギリス人家庭のご主人が、２人の実子がいるのに、もう１人養子を受け入れたという事実を、とても高く評価しているようだった。マリアンヌもフランス人なので、Ａｄｏｐｔｅｄをうまく英語で私に表現できなかったようだが、流石マリアンヌ、そこらへんの複雑なイギリス人家庭の事情を、聡明な頭で理解しているようであった。

私はある日、イギリス家庭の中の子に言われた。

「ヤス、なにか、僕と遊んで！」

「うん、いいよ、なにがいいかな？」

子供「じゃ、チェス（将棋）なんてどう？」

私「うん、チェスは日本のチェス「将棋」しか、やったことないけど、試してみよう」

私は、中の子と、チェスを始めた。

これが、意外や意外、結構、チェスを指せてしまうのだ。

中の子「そうなんだ、チェスは、あのね、インドが起源（チャトランガ）なんだ！

たぶん、インドが起源で、西に伝わったら、チェス、東に伝わったら、将棋なんだ」

こんな小学校低学年の子供が、こんなレベルの高い話するとは、全然、思わなかったので、正直言って、驚いた。

マリアンヌは、「ギャールが、ギャールが」っていうから、なんだ？ギャール？？？って、思って怪訝（けげん）な顔をして？？？みたいな顔を

した。どうやら、フランス訛りの英語で、「Girl が、Girl が」って言おうとしてらしい。相手に伝わってないが、一生懸命「ギャール、ギャール」と「女の子が、」って説明しようとしている、マリアンヌがとても健気で、可愛く見えた。。

ある日、イギリス人家庭で、夕食をすませて、リビングの時間だった、イギリス人のご主人と、マリアンヌと、私で、「なにかについて議論しよう」という事になった。

ご主人が、「自分の国の事をプレゼンしてみてくれ」と提案した。皆、それはいい、という事で納得した。

まず1人目は、フランス、リヨンのマリアンヌだ。マリアンヌは、自分の故郷のフランスについて、かなりの誇りの自負心（リヨンって、こんな凄い街なの！！）を持っていた。

「リヨンはね、とても素敵なフランス第2の街なの。特に、グルメ好きには、たまらない街だわ。

リヨンというと、なんていっても、「ポールボギューズ」の本店があるの。あそこは、フランスを代表する名店だわ。でも、なぜか3つ星のなかで、2つ星しかとれないの。リヨンにあるのが原因らしいの。パリで出店してたら、絶対、三ツ星レストランよ」と。

「ヤス、将来、「ポールボギューズ」があったら、あなたは行かなければならない。だった」

（You have to go to “Paul Bocuse”!）

「ポールボギューズ」に行った方がいいよ、ではなく、「ポールボギューズ」に行かなければならない、という、断定的な、肯定の表現だった。

私、「うん、分かった。将来覚えてたら、必ず行ってみるね！」

マリアンヌ「で、リヨンの街には、ポールボギューズ市場って言って、実にいろんな食材が安く売られてるの。やっぱ、私、リヨン大好きだわ！」

マリアンヌ、「フランスにも、いろんな人がいるの、パリの人は、おしゃ

れだけど、ちょっと冷たかったりする人いるの、その点、リヨンは大丈夫、みんな面倒見がよくて、親切なフランス人が多いわ。レンヌも悪くないわ。あそこの人も優しいし、モンサンミッシェルという、超有名な聖地があるわ！」

私、「そうなんだ！」

マリアンヌ、「ヤス、リヨンの作家、サン＝テグジュペリの星の王子様、とても素敵な本よ。子供向けだし、とても可愛いし。

もし、機会があったら是非読んでみてね。」

マリアンヌ「リヨンの歴史について教えてあげるわ。リヨンは昔、絹（シルク）の街だったの。絹で栄えたの。その昔はローマ人の時代もあって、リヨンには、小さなコロッセオとか、ローマ人の遺跡も残ってるわ。絹で充分栄えたんだけど、その後、なんかが原因で、リヨンの絹がダメになったの。それで、絹産業に従事していた、多くの女性達が失業したの。その女性達が仕事を変えて、リヨン中で、ブ

ション（フランス流
居酒屋）を開店したの。
　これが安くて美味しいってので、大評判に
なって、リヨン中で大繁盛したの。いまでも、
ポールボジューズほどでなくても、安くて
美味しいブションが、リヨンに沢山、あるわ！
　私は、「ブション」が当然、何を意味するのか分からなかったし、「ブション」を「ブッチャー（肉屋）」と間違いて理解した。
私「そうか～、マリアンヌ、リヨンには、肉屋が多いんだね～」と返した。
　マリアンヌは大爆笑した。
「ヤス、違う違う、ブッチャーでなく、
ブションよ。ブ・ショ・ン。。。しょうがないな、覚えておいてね」
マリアンヌ「それでね、ブション（フランス流
居酒屋）を経営している、女性達を、「リヨンの母」って言うの。「リヨンの母」は、とても料理上手だし、面倒見もいいし、優しいし、貫禄が

あるの、そういう存在なの！」

私「ふーん、じゃ、マリアンヌは、「リヨンの母なの？」

また、トンチンカンな事言っちまった。

マリアンヌ大爆笑、「違う、違う、私はリヨン出身だけど、リヨンの母じゃない」

「まあ、リヨンは、そんな素敵な街よ。ヤス、将来、機会があったら、是非、リヨンを訪れてね。」

最初は、「日本から来て変！」と言われた

リヨンっ子マリアンヌであるが、ホームメートとして、一緒に暮らすうちに、なんか好きと感情を持った。

フランスのリヨンっ子の、マリアンヌは、

とても自己主張が強く、個性強いんだけど、

私を「弟分」「ある種の子分」と感じ、

ときおり見せる色気や、優しさを持って接してくれる（尽くしてくれる？）なんかそんな感じであった。彼女に聡明さを感じたのも、彼

女がフランスで「飛び級」をしていると言う、事実にも、裏付けされたものであった。

ケンブリッジ、クイーンカレッジ沿いの銀通りを進んだケム川のほとりに、素敵なパブ（アンカーパブ）があった。

ここはマリアンヌさんが、特にお気に入りのパブであった。他の外国人も、ここのパブで、英国伝統のギネス（黒ビール）か、ラガーを飲んでいることが多かった。

英国はパブ文化が根付いており、アメリカにいる時よりも、お酒自体（ビール、スピリッツ）について、ある程度、世間が寛容的な文化があるんだなってっと感じた。

ある日、マリアンヌと、いつものようにアンカーパブに飲み会に言った。

マリアンヌの友達の友達が、

ケンブリッジ大のキングスカレッジの学生さんらしいのだ。その方が、帰りに
キングスカレッジの寄宿舎をチョットだけだが見せてくれるというのだ。非常に例外的な事らしい。
英国ケンブリッジには、３１のカレッジ（大学）がある。約１００年の歴史のある、英国の２つある最高学府（オックスフォードとケンブリッジ）の１つだ。
特に、トリニティカレッジと、キングスレッジは超大きい。噂では、この２つは、ケンブリッジ大学の中でも、エリート中のエリートらしい。
グループで、キングスカレッジの寄宿舎の扉をあけ、少しだけ、中の様子を拝見させてもらった。
なんか、世界中のエリート中のエリートが、
その中で、楽しそうに談笑している様子をチョットだけ、見る事ができた。

帰り際に、僕は、マリアンヌに言った。

「今日は、キングスカレッジの寄宿舎内をチョイ見できたのは、とても貴重な体験だった。本当にありがとう！」

マリアンヌが言った。「そうね、貴重な体験だった。でも、あなたにもお礼が言いたい。今日、寄宿舎の中の様子を観る事が出来たのは、私の友達の友達のおかげだけではなく、あなたの友達のマリオの一言もあったからしいのよ！」

私はあまり事情がよく分からないが、僕の友達のマリオも、なんか関係しているらしいのだ。僕の分からない所で、いろいろ繋がっているんだなって感じた。

ケンブリッジの語学学校は、月曜日から金曜日まで毎日授業があり、僕は毎日15分自転車に乗って通った。土日は、

完全お休みだった。

土日はお休みなので、僕は1人で、旅行に出る事が多かった。（他の費やし方もあるんだろうが。。）

① 中世の古都ヨーク、担当教師キャサリン先生のお勧めの街だった。確かに、

② 正解だった。ローマ時代の中世の城壁、中世の街並み、など堪能した。

（世界一の鉄道博物館がヨークにはあるらしいのだが、どこにあるのか、分からなかったので、行く事ができなかった）

ケンブリッジから、ヨークまでは、電車で行ってみた。所要時間1時間位であろうか？

インターシティーという、特急電車に乗って行った。

② 北のスコットランドにも行ってみた。

鉄道ではなく、ケンブリッジから、コーチ

（Ｃｏａｃｈ（馬車の意）と言って、深夜夜間長距離バス（片道６０００円位だったかな））で、スコットランドまで行った。

バスで、スコットランドの首都、スコットランドは、午前６時位についた。

まず、スコットランド城のランドマーク。スコットランド城に行ってみた。ここは凄い。地盤が、とてもとても大きな巨岩の上のお城がたっているのだ。護衛しているのは、英国近衛兵。。

メアリースコットランド王女と言って、悲しい歴史があるらしいが、深い歴史は、理解できなかった。

ある日、僕は語学学校から自転車で家へ帰った。家の中で、電話がルルルっと、鳴った。

そうすると、二階からなにか、気配が。。。
マリアンヌが、二階でシャワー入っていたらしく、一階に、裸にバスタブ一枚だけ羽織って、一階の電話の受けに来たのだ。
私は、その姿ノマリアンヌと、出くわしたのだ。
「ギョエー」彼女は、思いっきり、驚愕した。
そして、脱兎のごどく、二階へと走って去ってしまった。
英会話学校の、担当のキャサリン先生が、僕の宿題の英語作文について、こう評してくれた。
「あなたは、口語（スピーキング）は、ダメで、もうちょっと努力がいるけど、
あなたの英作文はなかなかいいわ。
少し間違えもあるけど、なかなかしっかり構成されている。今後も頑張ってね。

語学学校のキャサリン先生の私の英語能力に対する、率直な評価と、思わぬ私の英語作文能力の高評価に、とても嬉しく感じた。

私、「まあ、英語の口語はしょうがないわ。だって、英国来て、まだ2週間しかたたないんだもん。」

キャサリン先生は、ある日、私たちクラスに宿題を課した。「自分の国と、自分の国の文化について、英語で書いて、みんなの前でプレゼンテーションしなさい。」

なんか、クラスの中でも英語の上手な外国人から、順番にプレゼンテーションした。例えば、スペインの女の子はマドリッドと、バルセロナの違い、天才建築家、ガウディの事とか、について話していた。。

キャサリン先生は、生徒の発表で、

シャイなイタリア、トリエステのマリオ（３０年経った今でも、マリオと私は手紙の交流などで、現在も交流がある！）私は、発表の順番は最後の方だった。

マリオの発表は長かった。マリオは、真面目な性格だから、とてもまじめに、自国と自国の文化について、頑張って、作文を書いてきていたようだった。

「僕は、イタリアのトリエステってとこから、来てます。トリエステには、長い歴史があり、いろいろ素敵な所があります。海産物も良く取れ、とても美味しいです。

あと、ミラマーレ城って言って、ハプスブルグ家と関係が深いのですが、小さいのですが、海に面して、とても素敵なお城があるんですよ～」

そんな感じで、「ようやくケンブリッジでの生活に、慣れてきたな

〜と思ったら、
1か月の夏休みのケンブリッジホームステイ滞在は、もう終わりを告げた。
イギリス人家庭を去る最終日に、英国人家庭の部屋で、英国人のご主人にこう尋ねられた。
「ヤス、イギリスの1か月の滞在どうだった？」
私、「とても貴重な体験になりました。
一生の記念の思い出になりました。
あなたには、大変にお世話になりました。どうやって、恩返ししたらいい？」
イギリス人主人「あなたは実の高徳の人だ。
いままで、多くの人を受け入れて来たが、
そんな人はめったにいない。
でも、あなたが、もし、そう感じている
なら、イギリスのある団体に少額でも、構わないので、寄付してほ

しい。できたら、大きなお金を1度だけではなく、少額な額の寄付でいいから、継続にしてほしい。そうしたら、日英関係は、明らかに、より良好なものになるでしょう！」

「はい、では失礼します！」

私は、英国人のご主人と堅く握手をし、

1か月お世話になったステイ先の英国人宅を、後にした。。

（終わり）

◎おわりに

この滞在記・恋愛記・旅行記は、私の約３０年前の英国ケンブリッジの記憶を、今思い出しながら、書き上げたものです。

わずか１か月のホームステイ滞在であったが、そこには、とても大事な学び、深い学びが沢山あった。

自分は、１か月英国のケンブリッジに滞在したのであって、イギリス社会、フランス社会のすべてを理解している訳ではない。２３歳の大学生の自分が観た、等身大の自分の視点から、書いた。

日本の２０代の若者（大学生）で、海外にホームステイしたいとは、思っているが、迷っている人もいるかもしれない。

そういう人達に、「是非、若い時期（２０代）に、海外ホームステイ行ってほしい！」と、背中を押したい。

２０代の頭が柔軟な感受性の大きくある時期に、海外ホームステイする

と、海外の人達とのコミュニケーションを通して、視野が世界に広がるのだ。そして、また日本のいい面、（治安がとてもいい、セブンイレブンなどコンビニが街の至る所にあり、便利で、しかも実に高い品質の商品やサービスを提供しているなという、日本の長所も多々、感じなおした。）

自分も、日本にいる時は、英語なんて遊び半分で、近所のＮＯＶＡに行くくらいだった。（まあ、全くなにもしないよりは、いいかもしれないが。。）（まあ、英検とった事ないが、自分のレベルは、２級～準１級の中間レベルだったと思われる。）

自分が思い描いたようにはホームステイに行って、語学が上達しないかもしれない、嫌な思いをする事もあるかもしれない、しかし、それらの体験も全部含めて、

「若い時期に海外滞在（ホームステイとか）するのは、後々の人生の宝物の思い出になるだろう。

２０代の、これからの将来、無限の可能性がある方々、心から応援しております。

最後になりますが、この本の製作において、ＯＰＥＮＡＩのチャットＧＰＴ先生に、多大なご協力を頂きました。チャットＧＰＴ先生に、心から敬意を表するのと共に、心から厚くお礼申し上げます。

◎参考文献

①森鴎外、「阿部一族・舞姫」、新潮文庫、１９６８

②藤原正彦、「遙かなるケンブリッジ」、新潮社、１９９１